

## 序論：歴史的文化学とメディア学の中の書籍学

シュテファン・フュッセル著  
竹 岡 健 一 訳

「書籍業界は、目下ドイツにおいて、広範なパースペクティブを持つ挑発的な変化を経験している。」2013年半ば、ドイツ書籍販売業株式取引業者組合の代表幹部アレクサンダー・スキピス (Alexander Skipis) は、アクチュアルな経済数値と電子書籍市場に関する最近の研究<sup>1</sup>を紹介したさい、こう断言した。デジタル的な変化は、すでに15年前から、世界的に業界の関心を惹いていた。だが今、ドイツにおける電子書籍の売上は、2012年に3倍になっており、2015年までに市場割合の約15パーセントに、学問的書籍市場のような個別の分野では明らかにそれ以上になるだろう。数多くの出版社が新しい事業モデルを整備しようと試みている一方、固定した小売書籍販売は、この大変革の惨敗者となるように思われる。今や、小売書籍販売は、例えばオンライン・ポータルや実用的な事業モデルを通じて、自ら電子書籍の売上に（リーダーにも電子的テキストにも）関与することを試みねばならない。そうすることで、書籍販売は、その高い助言能力と、読書と本——印刷形態であれ電子形態であれ——のための社会参加によって、引き続き市場で利益を得ることができるだろう。

現代の大変革は、国家的な市場と個々の市場部分がもはや単独で考察され得ないことも明らかにする。ドイツ語諸国における市場は、世界的な売上の発展と情報の新しい提供者、および本というメディアへの社会的な慣れ親しみにおける文化的な変化に直接左右される。同様に、本、新聞、および雑誌の販売モデルは、今やこれまで以上に強力に、共同で視野に入れられ、完璧な状態にもたらされねばならない。そうすることによってのみ、ネットにおける20年間の「無料のメンタリティー」の後に、決定的な個所で支払を義務づけることに成功し得るのであり、それは、個人の尽力に依存した調査および内容の質を経済的に受け入れられる結果を持って保証することを出版社と編集部に可能にする。その他のアクチュアルな問いは、学問的な出版物へのオープン・アクセスによる接近の際の図書館と出版社の新しいパートナーシップに取り組む。例えば、学問の自己組織は、ピア・レビューの措置のようなものを持つ出版社原稿審査委員の高いレベルをうまく保持できるだろうか。

学問的認識の提案者・仲介者としての出版社の大きな意味と責任は、まさにビブリオグラフィー・シュス・インスティテュート (Bibliographisches Institut) やブロックハウス (Brockhaus) のような、ドイツにおける最後の大きな百科事典出版社の死によって、きわめて明白になる。確かに、ブロックハウスという商標名はベルテルスマン (Bertelsmann) の学識メディア部門によって獲得されたが、編集部が解体され、将来は印刷物も独自の電子事典も作られないであろうことが、2013年に公表さ

1 Börsenverein des deutschen Buchhandels e. V. (Hrsg.): Bewegung auf dem Buchmarkt: Aufbruchstimmung in Verlagen und Buchhandel nach Umsatzdelle in 2012 (07. 06. 2013). [http://www.boersenverein.de/de/portal/index.html?meldung\\_id=624693](http://www.boersenverein.de/de/portal/index.html?meldung_id=624693) [16.08.2013].

れた。書籍販売は、2世紀に亘って——自己負担で——様々な値段の質の高い百科事典を広い読者が使えるよう配慮してきた。出版社はこれまで、自らを知識と情報の保護者・仲介者と理解し、批判的な視点と事実の束にしたがって信頼できる百科事典を出版する編集部を維持した。もし人が、ネットで使えるフリー百科事典の実に様々な専門的知識を持った作者を頼りにしたくないなら、この重要な課題は今、例えば科学アカデミーによって、長期的プロジェクトとして、——またそれとともに社会から財政支援を受けて——引き受けられねばならないのだろうか。

メディアの大変革のこの、そして数多くの他のアクチュアルな問題は、書籍販売がこれまでどれほど重要な文化的・経済的役割を占めていたかを、またそれが何世紀にも亘って、すべての人々の知識と教養の保証とみなされ得たことを、はっきりとわからせた。ヨハネス・グーテンベルク (Johannes Gutenberg, 1400年頃～1468年) がマス・コミュニケーションの父親とみなされるなら、彼の発明と、植字、印刷、原稿審査、および販売といった領域における発展は、過去550年間においてすべての人々に知識と教養への自由な、妨げのない接近を保証したパラメーターである。その遺産の批判的反省は、この自由な接近を変化した技術的条件の下でも中心的な文化的・社会的課題として引き続き保証することがいかに重要かということに対する意識を研ぎ澄ませるだろう。

ドイツにおける独立したアカデミックな専門分野としての書籍学 (Buchwissenschaft) は、歴史、現在、および未来における本と商売のこの文化的・経済的役割を十分に考察する。<sup>2</sup>したがって、それは必然的に、文学、歴史学、応用社会研究、経済学、法律学の方法のレパートリーを利用する。書籍学は、その考察対象から定義づけられた学問であり、この対象に持ち込まれる様々な文化全体に関わる問題設定によって広げられる。

本書は、学問分野の選択に役立つとする。ないしは、ごく具体的に、書籍学の学士課程の学生のために、背景についての情報を提供しようとする。それらの情報は、この分野の役割と意味を学問的に導き出し、中心的な、選び抜かれた問題設定へと導き、最初の方法論的指示を与えることを可能にする。科学図書協会 (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) の定評あるシリーズにおけるこの導入では、この多様な学問分野のすべての側面をすでに包括的に紹介したり、それどころかそれらに答えたりすることは、考えられていない。そのためには、この学問領域のために、浩瀚なハンドブック<sup>3</sup>、しっかりした事典<sup>4</sup>、またはアカデミックな授業における個別の問題のさいに重要な特殊な出版物<sup>5</sup>が利用可能である。本書は、明確に、書籍学の初学者、または学際的な書籍学の研究領域と方法の重要な局面について情報を集めたいと願う歴史的、文学的、メディア学的副専攻の初学者を相手とする。様々な方法について、本書には、一目で基礎を伝える五つの「方法に関する知識」のコラムがある。文献一覧とリンケー一覧、ならびにその他の有益なアドレスの一覧は、この分野へのアプローチを容易にすることを助ける。

ドイツ語圏の国々における過去65年間の書籍学の業績は、とりわけ、コミュニケーションの物質

2 Füssel, Stephan: [Artikel] Buch. In: Weimar, Klaus (Hrsg.): Reallexikon der deutschen Literaturwissenschaft. Bd. I. Berlin 1997, S. 259-263.

3 Rautenberg, Ursula (Hrsg.): Buchwissenschaft in Deutschland. Ein Handbuch. Berlin/Boston 2013.

4 Lexikon des gesamten Buchwesens. 2. völlig neu bearb. Auflage. 7 Bände. Stuttgart 1987-2013.

5 Lucius, Wulf D. von: Verlagswirtschaft. 3. neubearb. u. erw. Auflage. Konstanz 2013.

性、グーテンベルクとインキュナブラの研究、技術史、書籍の歴史と図書館の歴史の関係、および出版社の歴史と書籍販売の歴史に関する基礎的な考察が刊行された歴史的書籍研究に、またそれと並んで、「成功に満ちた実践的教育といった傑出した個別研究」<sup>6</sup>にある。歴史学と文学のための補助学問という端緒から生じ、司書の職業教育のための「書籍研究」(Buchkunde)の枠内でさらに発展させられ、1947年以後は、マインツ大学、ミュンヘン大学、エアランゲン大学、ライプツィヒ大学に独自の講座が設立された。学術的団体は、この発展に、会議と独自の出版物をもって寄り添った。例えばとりわけ、株式取引業者組合の歴史委員会(Historische Kommission des Börsenvereins)、書籍の歴史のためヴォルフエンビュッテルの研究グループ(Wolfenbütteler Arbeitskreis für Geschichte des Buchwesens)、マインツの国際グーテンベルク協会(Internationale Gutenberg-Gesellschaft in Mainz)である。書籍学の研究は、1926年以後世界的に遂行され、五つの言語で刊行されている『グーテンベルク年鑑』(Gutenberg-Jahrbuch)において国際的なコンテキストで、1957年以後は『書籍史史料集』(Archiv für Geschichte des Buchwesens)において、1991年以後は『ライプツィヒ年鑑』(Leipziger Jahrbuch)において、1994年以後は『マインツ大学書籍学研究』(Mainzer Studien zur Buchwissenschaft)において、または最近では、国際書籍学会(Internationale Buchwissenschaftliche Gesellschaft)の年鑑『コデックス』(Kodex)において提供されている。

本書は、書籍印刷の意味に関する同時代人の陳述を反省し、百科事典、文献目録、および書籍販売の自伝的発言に見られる書籍印刷の評価を分析し、初期の書籍学的団体と研究施設を紹介することによって、15世紀における書籍印刷の始まり以後の書籍学の学問史(第2章)を初めて示すという方法を採用。このようにして、同時に、グーテンベルク以後の本の歴史の重要な段階への短い導入を与えることもできる。

「書籍の歴史とは何か」という問題設定の最初の根本的なリストアップを、1976年——ヴォルフエンビュッテルの研究グループの設立と同時に——アウグスト公爵図書館館長でゲッティンゲン大学のゲルマニスト、パウル・ラーベ(Paul Raabe)が紹介した。<sup>7</sup> 書籍のコミュニケーション循環の——およびそれとともにその研究の様々な局面の——最初の実用的モデルを、名声の高い書籍史研究者でグーテンベルク賞受賞者ローベルト・ダルントン(Robert Darnton、当時プリンストン大学、今日ハーバード大学図書館、ケンブリッジ大学、マサチューセッツ大学)が、1982年に提供した。<sup>8</sup> 彼のモデルは、様々に議論され、また今日も議論されており、——技術の発展に条件づけられて——補正されている。<sup>9</sup> だが、純粋なモデル分析から方法の議論までは、この学問分野が

6 Schüller-Zwierlein, André: Rezension zu: Rautenberg, Ursula (Hrsg.): Buchwissenschaft in Deutschland. Ein Handbuch. In: Informationsmittel(IFB)—digitales Rezensionsorgan für Bibliothek und Wissenschaft. URL: <http://ifb.bsz-bw.de/bsz321027914rez-1.pdf> [16. 08. 2013].

7 Vgl. Raabe, Paul: Was ist Geschichte des Buchwesens? Überlegungen zu einem Forschungsbereich und einer Bildungsaufgabe. In: Hundert Jahre Historische Kommission des Börsenvereins 1876-1976. Frankfurt am Main 1976, S. 9-16; Ders.: Die Geschichte des Buchwesens. Probleme einer Forschungsaufgabe. In: Raabe, Paul: Bücherlust und Lesefreuden. Beiträge zur Geschichte des Buchwesens im 18. und frühen 19. Jahrhundert. Stuttgart 1984, S. 1-20.

8 Darnton, Robert: What is the History of Books? In: Daedalus 111 (Summer 1982) 3, S. 65-83.

9 Vgl. Darnton, Robert: Old Books and E-Books. The Gutenberg Prize Acceptance Speech of 2004. In: Gutenberg-Jahrbuch 80 (2005), S. 17-20; Weel, Adriaan van der: The Communications Circuit Revisited. In: Jaarboek voor Nederlandse boekgeschiedenis 2001, S. 13-25; Murray, Padmini Ray/Squires, Claire: The Digital Publishing Communication Circuit. 2013. URL: <http://www.bookunbound.stir.ac.uk/research/infographic/> [16. 08. 2013].

20年来、高い問題意識を持って、偏見なく創造的に歩んでおり、それによって学問的ディスクールの中で接続能力があることを証明した、長い道のりなのである。

文学の「生活の座」(Sitz im Leben) についての社会史的な基本的問いを、既に18世紀の「文学史」(Literär-geschichte) が特徴づけていた。<sup>10</sup> 1968年以後の年月における文学の社会史的考察の潮流の中で、書籍学的な問題設定は、これまでより頻繁に、文学のディスクールの中で考慮された。<sup>11</sup> 1970年代には、短期間、ソヴィエトとポーランドから、社会学的な観点から本の役割と意義を分析しようと試みる自律した「書誌学」(Bibliologie) の意見表明が議論された。<sup>12</sup> ドイツにおけるポーランドの書誌学派の代表者は、エアランゲン大学のアルフレート・シュヴィルク (Alfred Świerk) であったが、その理論によれば、書籍学は、「社会の需要と期待に応じて、精神的内容のグラフィックな物質化に、その維持、引き渡し、普及の目的に」<sup>13</sup> 従事する。この「書誌学」のアイデアは、その社会主義国家内部における一義的なイデオロギー的固定化ゆえに、1990年代にはもはや追求されなかった。

しかし、ミュンヘン大学のゲオルク・イエーガー (Georg Jäger) は、社会における本の役割というコンテキストの中で、書籍は「機能的な社会的システムとして構想され得ないのか」という問いを取り上げた。彼はそれを

将来性のある学問的オプションと呼んだ。それは、社会のシステム理論的なモデル形成ならびにシステム理論の持続的発展への接続の可能性と、それらのサブシステムの一つ一つを提供する。システム理論を使って、本と書籍販売をそのすべての側面において (技術的、コミュニケーション的、文化的、経済的現象として) 統一的にモデル形成することが成功するかどうかは、もちろん未解決の問題である。<sup>14</sup>

マインツ大学の書籍学は、1997年、書籍市場の社会的位置づけを行うフランスのアナール学派の模範に倣った歴史的文化学とアングロ＝アメリカのカルチュラル・スタディーズが、この分野にとってよい方向づけを提供し得るかどうか、熟考した。

本の特異な特性と、文化と社会における本の役割と意味を適切に扱うことのできる問題設定を提供するのは、人間と人間によって形成された世界に関する学問であるとの自己認識を持ち、分裂した学問的観点の統合を達成しようと努力し、内容分析と外的形式、伝記と社会学、神学と哲学、手工業史と社会史、法律学的局面と経済学的局面を統合し得る明確な文化学的パースペクティブであろう。というのも、精神的価値としておよび商業の対象としての本の二重の性

10 原著第II章の2を参照。

11 Vgl. Grimminger, Rolf (Hrsg.): Hansers Sozialgeschichte der deutschen Literatur vom 16. Jahrhundert bis zur Gegenwart. 12 Bände. München 1980-2009; Glaser, Horst Albert (Hrsg.): Deutsche Literatur. Eine Sozialgeschichte. 9 Bände. Reinbek 1980-1991. および、原著 61～62頁のコラム「方法に関する知識 文学の社会史」も参照

12 Vgl. Migoń, Krzysztof: Das Buch als Gegenstand wissenschaftlicher Forschung: Buchwissenschaft und ihre Problematik. Wiesbaden 1990. 13 Ebenda, S. 8f.

14 Jäger, Georg: Buchwissenschaftliche Studiengänge an der Universität München und die Buchforschung als Wissenschaft. In: Leipziger Jahrbuch zur Buchgeschichte 4 (1994), S. 269-282, hier S. 276.

格はまさに、同時代の経済的、法律的、政治的な枠条件とならんで、一つの時代のすべての理念上の潮流が考慮されるとき初めて、より詳しく把握されるからである。<sup>15</sup>

書籍学は、その都度の対象と歴史的コンテクストに関連して、考慮すべき隣接分野の様々な方法的接近を引き寄せねばならず、その上また、技術史と精神史の相互関係を考察の中心に置かねばならない。書籍学は、(例えば)グーテンベルクが何を発展させたのかを問うばかりでなく、彼が技術史的にどのような関連の中にあったのか、写本の時代から意義深く引き継がれたものは何か、そしてまた彼の技術的發展と彼によって印刷された文書の選択の根底にいかなる根本思想があったのかを問う。それゆえ、物質性から出発して、法律的基盤と経済的要因と同様に、常にまた精神的関連も、このコンテクストでは例えば人文主義や神学の関連も、集めることが必要である。<sup>16</sup>

現代のメディアの大変革は、書籍学を、その姉妹分野である新聞学、およびコミュニケーション学とともに、ますます強く、方法論的対話に入らせる。加えて、コミュニケーション学の量的・統計的な方法のレパートリーと、経験的社会研究の方法が、書籍学においてもますます応用を見出す。<sup>17</sup> さらに、かつての個人的コミュニケーションとマス・コミュニケーションの区分は、今日よりきめ細かく眺められる。すでに初期の書籍印刷の分析のさい、——時代の受容可能性の枠内で——マス・コミュニケーションの観点が考慮される。例えば、両分野が、定期的な新聞の前段階としての初期のビラやパンフレットの同時期の書籍出版との相互作用、新しい読者層と購買者層の形成、読書プロセスの変化、学校教育と読書能力の相互関係などを考察する。

例としてあげたこれらの歴史的課題設定は、現代において構成し直される。というのも、すべてのメディアの一体化の兆しの中で、内容的収斂のみならず、出版と利用の収斂も浮かび上がってくるからである。電子書籍リーダーやタブレットは、将来、新聞、(専門)雑誌、実用書、またはオーディオとビデオの形式を含む文学といったこれまでの静的なジャンルを組み合わせるだろう。

現代のメディア・コンヴァージェンス (Medienkonvergenz) は、個々のメディアの合計に基づくのではなく、逆に、テキストとビデオ情報およびオーディオ情報の独自の新しい統一への融合に基づいているため、法律的・経済的観点、および専門分野に関する課題設定が新たに議論され、未来を指し示す方法論的熟考が試みられねばならない。<sup>18</sup> これに関して、ヨハネス・グーテンベルク大学のドイツ政府重点研究拠点「メディア・コンヴァージェンス」は、2012年以来、共同の方法論ゼミを提供しており、それは既に実現した分野横断的な協力へと向かった。<sup>19</sup>

形式的対象としての書籍に方向づけられた学問は、ハイブリッドな方法論で研究を行う。つまり、それは、歴史的書籍研究の中心問題の中に、歴史的、文芸学的、法律的、経済的方法論と結びついて、納得の行く成果を提示した。そして丁度、メディア学的方法論でもって、現代のメディアの大変革を批判的に反省し、その都度の事例に関して様々なコンテクストで研究を進めている。

15 Füssel, Stephan: Buchwissenschaft als Kulturwissenschaft. In: Füssel, Stephan (Hrsg.): Im Zentrum — Das Buch. 50 Jahre Buchwissenschaft in Mainz. Mainz 1997, S. 62-73, hier S. 63f.

16 Ebenda. また、歴史的文化学としての書籍学の幾つかの研究領域については、原著第三章を参照。

17 原著81～82頁のコラム「方法に関する知識 経験的社会研究」を参照。

18 Vgl. Jenkins, Henry: Convergence Culture. Where Old and New Media Collide. New York/London 2008.

19 Vgl. Füssel, Stephan (Hrsg.): Medienkonvergenz - transdisziplinär. Berlin/Boston 2012.

広い考察対象と広い問題設定は、ドイツにおいてその間に毎年200人以上になった書籍学の卒業生が、学問性と実践的方向づけの間で均衡のとれた課程を通じて、出版社の様々な領域、原稿審査と製造、宣伝、販売、広報活動において、小売書籍販売の指導的ポジションにおいて、編集部と通信社において、株式取引業者組合そのもののような組織、書籍見本市、業界ジャーナルにおいて、しかしまた図書館、文書館、および博物館において、ならびに学際的な学問においての活動のよい基礎を形成することにある。学生の関心に方向づけられた本書は、そのために、必要な知識、きわめて重要な基礎的文献、および中心の問題設定を紹介する。

## 解説

拙訳は、シュテファン・フュッセル/コリンナ・ノリック＝リユール『書籍学への入門』（2014年）から、冒頭に置かれたフュッセルによる「序論」を訳出したものである。（Stephan Füssel / Corinna Norrick-Rühl: Einführung in die Buchwissenschaft. Unter Mitarbeit von Dominique Pleimling und Anke Vogel. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2014, S. 7–12.）「書籍学」に関する「入門書」としては、本文でも触れられているウルズラ・ラウテンベルク編『ドイツにおける書籍学 ハンドブック』（2013年）があるが、同書が主に「研究者」を対象としているのに対し、本書は「書籍学」およびその隣接分野の勉強を開始する「初学者」を主な対象としている。したがって、ここに訳出した箇所は、「入門書」のそのまた「序論」に過ぎない。だが、この短い文章の中には、「書籍学」に関する基本的な知識がきわめて簡潔にまとめられている。すなわち、研究対象としての書籍、学際的な問題設定と研究方法、書籍研究の歴史とアクチュアルな現状、主な書籍学講座、主要関連団体と定期行物、基礎的文献、書籍業界との関係、書籍販売の文化的・経済的役割、およびメディアの大変革とそれによって書籍市場が蒙る影響などである。「書籍学」の概要については、拙論「ドイツにおける『書籍学』——概観とマインツ大学書籍学研究所に関する事例研究」（九州大学独文学会編「九州ドイツ文学」第27号、2013年、1～18頁）においてすでにある程度紹介しているが、拙訳はこれを補うものである。なお、原著について補足しておく、全体の内容は次のようになっている。

### I. 序論：歴史的文化学とメディア学間の書籍学

### II. 書籍学分野の学問的歴史

1. 書籍印刷に関する初期の反省とその結果
2. 16～18世紀の学問的出版物、書誌、百科事典における書籍学的問題設定
3. 19世紀における学問の細分化
4. 商売と職業教育の自己理解のための中心的記録
5. 学術的協会：アメリカ古書協会、株式取引業者組合歴史委員会、  
グーテンベルク協会
6. 1947年以後のアカデミックな書籍学
7. 国際的コンテキストでの書籍研究

### Ⅲ. 歴史的・文化的パースペクティブを持つ書籍学の伝統的な研究領域

1. コミュニケーションの物質性
2. 書籍販売と出版社の歴史の記述
3. 文学仲介
4. 書籍愛好と由来研究

### Ⅳ. 社会的、経済的、または法律学的パースペクティブを持つ書籍学の新たな研究領域

1. 読書、読者、書籍市場の研究
2. 書籍販売の法律的問題
3. メディア経済と出版経済
4. 現代の電子書籍市場とソーシャル・リーディング

また、「方法に関する知識」(Methodenwissen)の五つのコラムの内容は、「分析的書誌学/分析的印刷研究」(Analytical Bibliography / Analytische Druckforschung, S. 50f.)、「原典批判」(Quellenkritik, S. 55f.)、「歴史的書籍研究における計量書誌学/統計的方法」(Bibliometrics / Statistische Methoden in der historischen Buchforschung, S. 56f.)、「文学の社会史」(Sozialgeschichte der Literatur, S. 61f.)、「経験的社会研究」(Empirische Sozialforschung, S. 81f.)である。これらとは別に、「書籍学課程の学生のための職業の展望」(Berufsperspektiven für Studierende der Buchwissenschaft, S. 68f.)というコラムも設けられおり、さらに、巻末には、「書籍学」に関連する主な書誌、ウェブサイト、関係機関連絡先の一覧も掲載されている。

拙訳が「書籍学」および「書籍研究」に関心を持つ方々のお役立てば幸いである。

付記：本研究はJSPS科研費 25370361、および財団法人国際文化交流事業財団人物交流派遣・招聘事業（2012年度派遣）の助成を受けたものです。